

東大病院のペスト騒ぎ

薬学雑誌 1901年度 635頁, 742頁

地区通信欄を見ていると赤痢、ペスト、コレラ発生のニュースが毎月のようにある。たいてい2, 3行だが、たまに長い記事もある。

明治34年5月21日、医科大学付属病院、西配膳室で1頭、物置で1頭の斃鼠、22日西配膳室で病鼠が1頭発見された。25日にペスト菌が検出され、26日入院患者を急いで時計台病室に移し、内科は向こう10日間交通制限、病室は石炭酸水、昇汞水で消毒した。各科とも外来診察をやめる。「模範薬局にては外来診察休止のため投薬は毎日百名の少数なるも、大学各部の清潔法施行に使用の消毒薬、亜硫酸団子の調製、配布、捕鼠器消毒などなかなか多忙なりし」

その後捕獲された鼠160余頭はことごとく解剖されたが、いずれもペスト菌を発見できず。しかし6月16日解剖学教室

で捕まえた鼠にペスト菌が発見され、緒方衛生学教室主任は本部に報告する。19日内科玄関床下(建物構造を想像せよ!)で発見された斃鼠は「ペスト菌発見」と各新聞に誤報された。

再度ペスト菌発見から、鼠捕獲に尽力することが本部から各分科大学に通達され、全学委員長に薬学の丹波敬三教授が任命された。鼠1頭につき5銭、10頭ごとに1円の割増金を払うこととし、捕鼠器百余個を各分科大学に配分する。これにて6月24日~7月13日までに捕まえた鼠は275頭。しかしペスト菌は見つからなかった。

また、内科に近接していた生理、衛生、医化学、薬物の4教室は6月に新棟に移転したので旧建物は焼き払うこととなる。6月25日から周囲を鉄板にて囲い、中で大穴を掘り始め、27日には本郷消防第4分署から40名の消防夫が出張、家屋を取り壊して穴に放り込み点火、7月2日まで毎日燃やし続けた。逃げ出でたる鼠は囲外に出られず皆火中に投げられた。

同月号の山梨県通信では6月21日北巨摩郡で1人ペスト発症、26日死亡、とある。

小林 力